「海外からの手紙」

台湾　台北日本人学校　新内　俊允
（下関市立一の宮小学校）

２０１７年１２月、台北日本人学校への派遣を通知された。今から約２年前のことである。その時の私にとって、台湾はいつか訪れてみたい人気旅行先の１つであった。台湾を訪れたことはなく、知っている中国語も「ニーハオ」「シェシェ」のみ。そんな状態で、ここ台北に移り住んだ。

何事にも言えることだが、人から聞いた話やメディアが伝える情報を基にイメージした事と、実際に体験したり肌で感じたりする事はまるで違う。まさに「百聞は一見に如かず」である。挙げればキリがないが、印象に残っていることをいくつか紹介させて頂きたい。

１.「親日家が多い」イメージを持っていたけれど・・・

想像以上であった。「Oh！日本人！二ホン、イチバーン！」と言われたこともある。日本が統治していた時代に、様々なインフラが整ったこと、そのことに感謝している台湾人が多くいることは知っていたが、実際、その通りのようだった。「日本人は勤勉で、仕事ぶりが丁寧だ」と言う方もいて、日本人であることを誇らしく感じた。

しかし、それは統治時代の一面にすぎない。統治していた５０年間、ずっと感謝され安定していたわけではない。日本の言語や文化を強要された辛い経験をした人々が、今も台湾で生きている。統治時代初期には、現地の人々との間で何度も抗争が起き、それを日本政府は武力で制圧してきた。そうした史蹟を訪れると、当時の台湾の人々、日本から渡ってきた人々、双方が払った犠牲に、きゅっと心が縮む思いがする。「親日家の多い台湾」の現状に、単純に「よかった！バンザイ！」とできるわけではない。

２.「台湾は活気あふれる国」というイメージを持っていたけれど・・・

街は賑やかである。交通量も多く、特にバイクの多さには驚いた。夜市では小さな店が所せましと並び、観光客だけでなく、地元の人も食べ物・飲み物を片手にぶらぶら。毎晩、お祭りの雰囲気である。人々の話し声も大きめだと言ってよいだろう。日本から遊びに来た友達を、街の小さな飲食店に連れて行くと、「あの店員さんは怒ってるの？」とよく尋ねられる。

ここまではイメージ通りだが、こちらに移り住んで最もインパクトがあったのは、台湾人がとにかく世話好きだということである。中国語では「熱心」と表現する。私が中国語を理解できないことなどお構いなしに、すごい熱量で親切にしてくれる。そして、その動き出しがとにかく速い！日本人の中には、「余計なお世話だろうか？」「何と声をかけようか？」などと、親切にすることを躊躇してしまう人がいないだろうか。台湾人は、親切にすることに迷いがない！子供連れで公共交通機関に乗ると、同時に何人もの方が席を譲ろうとしてくださり、どこにしようか迷うこともあった。「熱心」、見習うべきである。

３．漢字が分かるから中国語も何とかなる！と思い込んでいたけれど・・・

甘かった。。。見たことのない漢字（旧字体や日本では使わない漢字）も多く、漢字まみれの標記に始めの頃は頭がクラクラした。何より発音は全く別で、「音読みをすれば通じるかな？」というのは完全な勘違いだった。例えば、私が住んでいる「天玉街」という地区は、「ティエンイュジエ」と読む。「てんぎょくがい」では、全く通じなかった。

日本語にない音ばかりで、うまく発音できないし、聞き取れないことも多い。そんな時は、漢字で筆談したり、指さしたり、表情をオーバーにしてみたり・・・台湾人の「熱心」と自分たちの奮闘で何とかなるものである。

漢字を使う言語、仏教徒の多い国、箸を使う食文化・・・日本との共通点も多いが、異なる文化風習も多い。一年の中での大きな節目は旧暦で祝い、信仰心が厚く日常の中にも宗教に由来した物事が多い。

意外だったのは、必ずしも「主な主食＝米」ではないことだ。てっきり、台湾の朝食の定番はお粥だと思っていた。朝食にサンドイッチやハンバーガーを食べる人も多く、昼食では餃子を主食として食べる（こちらの餃子は大きく皮がもちもちしている）。もちろん小籠包も美味しいが、水餃子がこんなに美味しいとは思わなかった。訪台した際には、ぜひお試しいただきたい。

４．「環島」をしてみて・・・

台湾を一周することを「環島」と呼ぶ。１年目と２年目の夏に、面積が九州と同じくらいの台湾を、１０日以上かけて一周した。他の都市もそれぞれに特徴があり、足を運ぶことで感じ取れたことがある。

台湾には中央を縦断する山脈があり、その東側と西側で雰囲気が異なる。大きな特徴でいえば、中国大陸に近い西側（台中、台南、高雄など）が古くから発展してきた。オランダが統治していた時代は台南を拠点にしていたので、今でも当時の古跡が多く残っている。西側には、高速道路や高鐵（新幹線）が通っていて、交通も便利である。

一見すると台北と変わらないように感じるが、南部の方が比較的のんびりした雰囲気である。（台北ではめったに見られない）一軒家や比較的低層のマンションなども多いし、南部の人々は時間をかけて朝食を食べたり、ゆっくり話したりするそうで、特に台北育ちの人はそう感じるそうだ。また、北京語（中国語）ではなく、台湾語を話す人が多い。

それに対して、東側は地形的にも厳しい場所である。切り立ったリアス式海岸が続き、平地は限られている。都市間の往来手段は一般道と汽車しかなく、その地形を活かして多くの原住民族が暮らしてきた。学校や市役所などの建物には原住民のモチーフが施されている。澄んだ空気と青々とした山、見渡す限りの大海。台北や西側では味わえない絶景に包まれる。

これからも台湾で生活していく中で、多くの「百聞は一見に如かず」を見つけていきたい。